ぜんぶあいのせいだから

あらすじ

脚本家志望の河野樹里と映画監督志望の田中浩太は、徐々に迫るＡＩ（人工知能）の映画界への進出を目の当たりにしていた。二人の友人である石嶺涼介は、ＡＩが作成した脚本で映画を撮ることで世間から注目される。だがまだまだ精度の低いＡＩによる脚本。樹里と浩太はＡＩを脅威だとは思っていなかった。

お互い夢に向かって努力する日々だが、樹里は一向に結果が出ない。脚本家として活躍している桜井加奈乃にアドバイスをもらうも、成果は出なかった。心が折れ、実家に帰ろうとする樹里に、浩太はプロポーズをする。結婚という選択を前にして、まだまだ夢を追い続けたい二人は躊躇するが、樹里の妊娠が発覚。思わぬ出来事だったが、新しい命に歓喜し、二人は結婚する。

娘の愛羅が産まれて一年。世間は大き

く変わっていた。ＡＩが日常生活に溶け込み、映画界でもＡＩが当たり前のように使われる。ＡＩを活用する涼介は時の人となり、人件費削減やクオリティでもＡＩに太刀打ちできなくなった加奈乃は仕事がなくなった。

そんな社会で、浩太は諦めかけていた映画監督の夢を再び追うことを決意する。そしてその夢には、樹里の脚本が必要だった。二人で映画製作に向かうが、浩太は樹里の脚本に思うところがあった。浩太の会社の後輩も協力し、準備を進める中で、脚本家を目指す女子大生、小野田美羽と知り合う。美羽の脚本に、かつて樹里に抱いていたはずの希望を見出す浩太。葛藤しながらも樹里は脚本を書き上げるが、浩太が選んだのは美羽の脚本だった。

出産、育児を経たことで、脚本家としてのブランクを感じる樹里。変わらず夢

を追う浩太の姿を寂しく眺めていた。順調に撮影していた浩太だったが、美羽の脚本はＡＩを使用していたことが判明。ＡＩに否定的だった撮影スタッフは士気が下がり、映画の完成が危ぶまれる。困窮する浩太を励ましたのは樹里だった。

ＡＩに翻弄されながらも映画を撮り続ける浩太。樹里は、そんな浩太を見守ることに幸せを感じるのだった。

登場人物

河野樹里（25・27）　脚本家志望。浩太の彼女
田中浩太（25・27）　映画監督志望。樹里の彼氏

石嶺涼介（25・27）　映画監督。樹里・浩太の友人
佐々木海荷（25・27）　樹里の友人
桜井加奈乃（25・27）　脚本家。樹里・浩太の友人

遠藤大地（28・30）　浩太の先輩
上杉賢治（45）　浩太の上司
鈴原蓮（22）　浩太の後輩

山本幹夫（22）　鈴原の大学の同級生
小野田美羽（21）　鈴原の大学の後輩

田中愛羅（1）　樹里・浩太の娘

矢口穂香（25）　樹里の同僚

ＡＤ

○映画館・館内（夜）
並んで座っている河野樹里（25）・田中浩太（25）。
スクリーンにはエンドロールが流れている。
『監督　石嶺涼介』『脚本　ＡＩ』と流れる。

○同・喫煙所（夜）
樹里「ＡＩって脚本書けるんだね」
浩太「ネットの情報をめちゃくちゃ学習してるから脚本でも何でも書けるんだって」
樹里「へぇ、なんかすごいね」
石嶺涼介（25）、入って来て、
涼介「来てくれてありがとう」
浩太「面白かったよ」
樹里「うん。面白かった」
涼介「マジ？　樹里ちゃんにはボロクソ言われると思ってた」
樹里「何でよ」
涼介「だって本物の脚本家からしたらＡＩが書いた脚本なんてクソでしょ？」
樹里「んー、人が書いたと思えば下手だったけど、ＡＩならって感じ」
涼介「ですよねー。まぁ今回はＡＩが脚本を書いたっていうのを話題にしたかったからさ」

○居酒屋・店内（夜）
浩太「樹里ちゃん。見て見て」
樹里「うん？」
浩太、樹里にスマホの画面を見せる。
人がグニャグニャに動く不思議なアニメーションの動画。
樹里「何これ。キモ」
浩太「ＡＩが作ったコンビニのＣＭだって」
樹里「へぇ」
浩太「何かこれ見て安心した」
樹里「え？」
浩太「いやほらＡＩが映画界に進出してきてどうのこうのみたいなのあったじゃん？　で

もやっぱり人にしかできないんだなって思った」

○会社・経理課

樹里、隣のデスクの矢口穂香（25）に、

樹里「手空いたんだけどなんか手伝うことある？」

穂香「ううん、大丈夫。ＡＩがやってくれたし」

樹里、穂香のデスクのパソコンを覗き込むと、ものすごいスピードで自動的に計算がされている。

樹里「ＡＩシステムって便利だね。請求書も帳簿も自動でやってくれるなんて」

穂香「ほんと！　おかげで残業減ったし。ね、今日飲み行かない？」

樹里「ごめん、今日はちょっとやることあって」

穂香「脚本？」

樹里「うん。コンクール近くて」

穂香「そっかそっか。頑張ってね」

樹里「ありがと」

○ファミレス・店内（夜）

ノートパソコンに向かっている樹里。

向かいの席に配膳ロボットが来る。

子ども「あ！　わんわん！」

配膳ロボットにはしゃぐ子ども。

樹里、その様子を微笑ましく眺める。

浩太、樹里の席に来て、

浩太「お疲れー」

樹里「お疲れ」

浩太、タッチパネルでメニューを見る。

浩太「食ったら会社戻らなきゃ」

樹里「忙しいね」

浩太「まぁようやく仕事任されてきたし、勉強だと思ってさ」

樹里「そっか」

浩太「でも全然時間ないな。俺もまた映画撮りたいのに。やっぱ学生が一番時間あったな」

樹里「懐かしいね」

浩太「うん。あ、そうだ。この前の記事になっ

てたよ」
浩太、樹里にスマホを見せる。
樹里「（スマホを見て）人工知能と作る映画。若手映画監督の挑戦」
浩太「涼介もすっかり映研の出世頭だな。俺たちも続かなきゃね」

○繁華街（夜）
並んで歩いている樹里と浩太。
浩太「（電話していて）えーっと、明後日までには。え、明日ですか？」
樹里、浩太を見る。
浩太「了解です。はい」
浩太、電話を切る。
浩太「まじブラックだよ。映像業界」
樹里「ねぇ、明日って」
浩太「ごめん。また埋め合わせするから」
樹里「最近会えない日増えたね」
浩太「だからこうやって少しでも時間作ってるんじゃん」
樹里「少しすぎるよ」
浩太「じゃあもうさ、一緒に住んじゃうか」
樹里「……」
浩太「やっぱ嫌なの？」
樹里「嫌じゃないけどさ。……浩太くん結婚する気あるの？」
浩太「だからさ、同棲イコール結婚っていうのは」
樹里「だってそうしないとズルズル長引きそうで」
浩太「結婚はもちろん考えてるよ？　でも今すぐってのは」
樹里「じゃあどれくらい？　一年くらい？」
浩太「えーっと、二、三、年？」
樹里「しっかりとした目安がないと同棲は無理だって。浩太くん本当にちゃんと考えてる？」
浩太、ため息をつく。
樹里「まためんどくさがる」
浩太「樹里ちゃん」
樹里「もういいよ。会社行きなよ」

浩太「樹里ちゃん、好きだよ」
樹里「……分かった」
浩太「気を付けて帰ってね」
浩太、駅に向かう。
樹里、ため息をつく。

○映像制作会社・社内（夜）
遠藤大地（28）、コンビニ袋を下げて入って来る。
遠藤「今日も泊まり？」
浩太「そうですよ。もう辞めてやろうかな」
遠藤「おー、辞めろ辞めろ」
浩太「でも結局これが映画監督なる近道っていうか」
遠藤「プライベート犠牲にするしかないわな。彼女大丈夫なの？」
浩太「それが、今日もまた結婚の話に」
遠藤「まだ二十五だろ？」
浩太「結婚願望強いんですよ。子ども好きなんで」
遠藤「なるほどねぇ」
浩太「俺もまだ早いと思うんですけどね。俺は映画監督、彼女は脚本家って目標があんのに。子どもなんていたら」
遠藤「でも逃げられなくなるときが来るぞー」
浩太「ちょ、怖いこと言わないでくださいよ」

○カフェ・店内
スマホをいじっている佐々木海荷（25）。
樹里、海荷の席に着く。
樹里「お待たせ」
海荷「おー。待ってね、今レスバしてるから」
樹里「何してんの」
海荷「私のイラスト勝手にＡＩ化したやつがいるんだよ」
樹里「え、どういうこと」
海荷「ＡＩにイラストを何枚か学習させればその画風で好きなように画像作成できるってわけ」
樹里「そんなことできるんだ」

海荷「まじ営業妨害。凍結させる」

○家電量販店・店内

海荷、スマートスピーカーに向かって、

海荷「電気を付けて」

展示されている豆電球、光る。

海荷「あー、ほしいなぁ。スマートスピーカー」

樹里「いる？　電気くらい自分で付けなよ」

海荷「（スマートスピーカーに向かって）歌って」

スマートスピーカー「すみません、それは私にはできません」

海荷「無駄にイケボ。（スマートスピーカーに向かって）愛してるって言って」

樹里「バカみたいだからやめな？」

店員「おしゃべりできるＡＩも最近発売されたんですよー」

海荷「え！」

店員、小さなロボットを持ってくる。

店員「一人暮らしの方とか、小さなお子様の遊び相手にって人気なんですよ」

海荷「こんにちはー」

ロボット「こんにちは。お姉さん、可愛いですね」

海荷「やだー、この子連れて帰る！」

○街中

海荷「最近はすごいねぇ。もう彼氏とかいらないんじゃない？」

樹里「なんか怖いね」

海荷「怖い？」

樹里「ＡＩが日常に入って来るっていうか。そのうち人間の代わりになっちゃうんじゃ」

海荷「ＡＩに仕事奪われるっていうもんね。まぁ私らみたいなのは大丈夫だけど」

樹里「そうかな」

海荷「ＡＩイラストもさ、まだまだパースが狂ってたり、一発でＡＩだって分かるもんなのよ」

樹里「それっていつか人間を超えるんじゃ」

海荷「ないない。だとしても百年後とかの話でしょ？」

○アパート・樹里の部屋（夜）
ノートパソコンに向かっている樹里。
画面にはＡＩとのチャット。
『高校生の恋愛青春ドラマのあらすじを考えて』と入力すると、ＡＩが文章を返す。

樹里「（笑って）ほんとだ」
樹里、ＡＩとのチャット画面を閉じ、脚本を書き始める。

○映像制作会社・社内
上杉賢治（45）、企画書を見て、

上杉「なーんかパッとしないね」
浩太「そうですかね」
上杉「目新しさがないんだよ。そうだ、あれだ。ＡＩ使ってみるか？」
浩太「ＡＩですか？」
上杉「ＡＩに台本書かせてみろ。なんか流行ってるだろ」
浩太「はぁ……」

× × ×

上杉、浩太のパソコンを覗いて、
上杉「これこれ！　こういうのだよ！　頭からトマト生えて来るなんて人には思いつかないだろ？」
浩太「（苦笑いして）そうっすねぇ」

○アパート・樹里の部屋（夜）
ベッドの上でテレビを見ている浩太。
樹里、スマホを見ている。
画面には『一次審査通過者』の文字。
画面をスクロールし、小さくため息をつく。

浩太「あ、これ加奈乃のドラマじゃん」
テレビにはドラマの予告ＣＭが流れて

いる。
『脚本　桜井加奈乃』の文字が流れる。
浩太「売れてるねぇ。樹里ちゃんもコンクールで入賞したら加奈乃みたいになれるんじゃない？」
樹里「……簡単に言わないで」
浩太「じゃあ営業かければ？」
樹里「私そういうの苦手だし」
浩太「そんなん言ってる場合じゃないって。このままじゃいつまで経っても」
樹里「分かってるよ。いちいち言わないで」
浩太「俺はただ樹里ちゃんにもっと頑張ってほしいから」
樹里「頑張ってるよ！」
浩太「だから（と言いかけてやめる）」
浩太、身支度をする。
樹里「帰るの？」
浩太「ゆっくり休みたいから」
浩太、出て行く。

○会社・食堂
樹里、スマホを見ている。
画面には『ドラマシナリオコンクール受賞者決定』のホームページ。
『入賞　桜井加奈乃（22）』『佳作　河野樹里（22）』の文字。
樹里、息を吐いて、メールアプリを開く。

○撮影スタジオ・喫煙所
タバコを吸っている浩太。
遠藤、灰皿スタンドにタバコを捨てる。
浩太、大きなため息をつく。
遠藤「なんだ悩みか？」
浩太「はい」
遠藤「彼女か？　仕事か？」
浩太「どっちもです。まず彼女の方なんですけど」
遠藤、もう一本タバコに火を付ける。
浩太「せっかく才能あるのに行動しないんですよ。それ見てヤキモキしちゃって。でも口出

したら不機嫌になるし」
遠藤「あんま口うるさくするなよ。彼女っての
は基本的に優しくされたいんだから」
浩太「えー、でも」
遠藤「はい、解決。次、仕事は」
浩太「上杉さんがＡＩに味しめてあらゆるプロ
ットをＡＩに書かせろと言ってきます」
遠藤「どうせすぐ飽きるって。上杉さんも世間
も。もう奇抜なもので腹いっぱいだわ」
浩太「ですよね。あー、いつＡＩが仕事奪って
くれるんですかね」
遠藤「ほんとだよ。定時で帰らせろ」

○アパート・樹里の部屋前（夜）
コンビニ袋を下げている浩太。
ため息をついてからドアを開ける。

○同・樹里の部屋（夜）
コンビニ弁当を食べている樹里と浩太。
樹里「この間ごめんね」
浩太「いや。俺こそなんか言っちゃって」
樹里「あのね、今度ドラマの企画書見てもらえ
ることになった」
浩太「え、ほんとに？」
樹里「昔賞取ったときに名刺交換したテレビ局
の人に連絡してみたら、ちょうど企画集めて
たみたいで」
浩太「チャンスじゃん」
樹里「まぁ、まだどうなるか分かんないんだけ
どね。他にも声かけてるみたいだし」
浩太「樹里ちゃんなら絶対いけるって。そうだ、
加奈乃にアドバイスもらえば？」
樹里「えー、いいよ」
浩太「俺からも頼んであげるよ」
樹里、箸を置く。
浩太「あれ、もういいの」
樹里「なんか最近胃がムカムカして」
浩太「大丈夫？」
樹里「うん」

○ファミレス・店内（夜）
桜井加奈乃（25）、樹里の席に駆け寄って来る。
加奈乃「樹里ー、久しぶり」
樹里「加奈乃。ごめんね、浩太くんが勝手に」
加奈乃「ううん、同期だもん。いくらでも力になるよ。企画書なら私も普段書いてるし」
樹里「ありがとう」
加奈乃「じゃ、さっそく見せてもらっていいかな」
樹里、加奈乃にノートパソコンを見せる。
加奈乃「うんうん。こういうテーマね……」
樹里、加奈乃から目をそらす。
加奈乃「んー、なんていうかな。すっごく面白そうなんだけど、それが伝わってこないっていうか」
樹里「書き方が悪いってこと？」
加奈乃「それもあるんだけど、なんだろう。テーマが一貫してない感じがするかなぁ」
樹里「そう……」
加奈乃「あ、でも樹里はあんまり企画書書いたことないんでしょ？　機会もそんななないもんね」
樹里、テーブルの下で拳をぎゅっと握りしめる。

○居酒屋・店内（夜）
涼介「樹里ちゃんは？　今日いいの？」
浩太「うん。加奈乃と会ってる」
涼介「加奈乃と？　何で」
浩太「脚本のアドバイスもらうために」
涼介「へぇ。売れっ子脚本家にアドバイスもらったら無敵だな」
浩太「そうそう。加奈乃が同期でラッキーだったよ」
涼介「……まぁ樹里ちゃんもここでプライド持ち込むようならそこまでか」
浩太「え？　なんて？」
涼介「いいやー」

○ファミレス・店内（夜）
加奈乃「でもでも、入りはすっごくいいと思う！　さすが樹里」
樹里、小さく深呼吸して、
樹里「悪いところ、全部教えてほしい」
加奈乃「え？」
樹里、頭を下げる。
樹里「お願いします」
加奈乃「うん、分かった！　まずね、企画意図のところなんだけど」

○会社・経理課
樹里「ごめんね、ほんと」
穂香「全然大丈夫。残業代稼いじゃおっと」
樹里「ごめん」
穂香「頑張ってね。脚本書けるなんてすごいもん。応援してる」
樹里「ありがとう。お先に」
樹里、出て行く。

○ファミレス・店内（夜）
樹里、ノートパソコンで作業している。
あくびをする。
ジュースを一気飲みする。
樹里「――よし」

○映像制作会社・社内（夜）
浩太、スマホを見ると、『樹里』から『頑張るよ』とラインが来ている。
浩太「頑張れ」

○会社・廊下
電話をしている樹里。
男（電話）「普通ですね」
樹里「（電話をしていて）え？」
男（電話）「言ってしまえばありきたりなんですよ。もうちょっと新しさがないと」
樹里「そう、ですか」
男（電話）「この程度なら誰でも書けます。まぁ、また書けたら見せてください」

樹里「はい……。ありがとうございました」
樹里、電話を切る。

○会社・女子トイレ
樹里、個室から出ようとする。
同僚の声「樹里ちゃんってさぁ脚本書いてるんでしょ？　それ一本でやってかないのかな」
樹里、止まって聞き耳を立てる。
鏡の前で化粧直しをしている穂香と同僚。
穂香「（笑って）無理でしょ」
同僚「確かに。全然脚本の仕事してないもんね」
穂香「周りと違うんです感出してるけど、結局は夢追い人って感じ。とっとと諦めればいいのに」
樹里、便器に嘔吐する。

○ファミレス・店内（夜）
樹里「仕事辞めようかな」
浩太「脚本一本でやってくってこと？」
樹里「（首を横に振って）実家帰る」
浩太「帰るの？」
樹里「最近体調も悪いし、今はもう休みたい」
樹里、テーブルに突っ伏す。
浩太「この間の、ダメだったの気にしてる？」
樹里「……」
浩太「またチャンスあるって。なんなら加奈乃に口聞いてもらって」
樹里「そんなことできない！」
浩太「……じゃあ諦めるの？」
樹里「分かんない」
樹里、手で口を抑えてトイレに走る。
配膳ロボットとぶつかる。
配膳ロボットの液晶画面が泣き顔になる。

○同・女子トイレ（夜）
樹里、便器に顔を突っ込んでいる。
ノックの音。
浩太の声「樹里ちゃん！　大丈夫？」

樹里「大丈夫……」

○同・女子トイレ前（夜）
浩太、ドアをじっと見つめる。
浩太「――樹里ちゃん」

○同・女子トイレ（夜）
浩太の声「結婚しよっか」
樹里「……え？」

○同・女子トイレ前（夜）
浩太「結婚しよう、樹里ちゃん」
ドアが開く。
樹里「……今、ここで、言う？」
浩太「結婚して、俺とずっと一緒にいてよ」
樹里「ちょっと、考えさせて。今は具合悪すぎて無理」

○映像制作会社・喫煙所
タバコを深く吸う浩太。
遠藤、入って来て、
遠藤「おい、タバコ休憩長いぞ」
浩太「すいません……。でも今の俺にはこれが必要で」
遠藤「何だよ、振られたのか？」
浩太「俺、勢いでプロポーズしちゃいました」
遠藤「は？　何で？」
浩太「彼女が実家帰るって言ったんでつい」
遠藤「まぁ勢いは大事、か？」
浩太「やっちまいました……」
遠藤「男は度胸だ。撤回するわけにもいかないでしょ」
浩太「そう、ですよねぇ。いや、でも結婚て。結婚指輪っていくらするんですか」
遠藤「給料三か月分」
浩太「うわー、まじか。新しいカメラ買う貯金が……」
遠藤「結婚ってなるとカメラとか言ってられないぞ」
浩太「そうですよね……。俺まだ撮りたいんで

すけど」

○カフェ・店内

海荷「プロポーズ？」

樹里「うん」

海荷「よかったじゃん」

樹里「本当に結婚しちゃっていいのかな」

海荷「えー、結婚したかったんじゃないの？」

樹里「いざ現実になるとビビるっていうか」

海荷「さっそくマリッジブルー？」

樹里「だって、これから人生の選択を自分一人でできなくなるってことでしょ？　自分のやりたいことだけできなくなるっていうか」

海荷「あぁ、確かにねぇ。家事だ育児だでイラスト書く時間なくなるの嫌すぎる」

樹里「まぁ私は……。どうせ脚本で食べていけないし。結婚、しちゃってもいいのかな」

海荷「本当に？」

海荷、樹里を見つめる。

樹里「だって」

海荷「本当にいいの？」

樹里「私やっぱり……脚本書き続けたい」

海荷「……決まりだね」

樹里「え？」

海荷「仕事は辞めな。そんな胸糞悪い連中と働く必要ない。んで脚本に集中しな。一人ならバイトでも十分でしょ？」

樹里「浩太くんとは？」

海荷「それは樹里の好きにしな」

樹里「私は、うっ……」

樹里、慌ててジュースを飲む。

海荷「大丈夫？」

樹里「大丈夫、大丈夫。ちょっと吐き気が」

海荷「えー、病気？」

樹里「何だろ。でも酸っぱいもの取れば収まんの」

海荷、頬杖をついて、

海荷「……ベタだねぇ」

○公園・広場（夜）

ベンチに座っている浩太。
緊張していて落ち着かない様子。
樹里、歩いてくる。
浩太「樹里ちゃん」
樹里、浩太の隣に座る。
浩太「体調は？　大丈夫？」
樹里「うん。今日病院行ってきた」
浩太「え、大丈夫なの？」
樹里「うん」
浩太「……あの、この前のさ。結婚の、ことなんだけど」
樹里「うん」
浩太「考えた？」
樹里「考えた」
浩太「俺も、考えたんだけどさ」
樹里「私妊娠した」
浩太「え」
樹里「妊娠した」
浩太「……まじ？」
樹里「ごめん私も油断した。今妊娠するなんて」
樹里、浩太を見ると号泣している。
樹里「え、何、どうしたの」
浩太「う、嬉しい……」
樹里「え？」
浩太「俺が、俺がパパかぁ……。女の子？　男の子？」
樹里「いやまだ分かんないから」
浩太「女の子がいいなぁ。絶対パパって呼ばせる。あ、名前はどうする？」
樹里「いや、あの気が早いから」
浩太、樹里を抱きしめる。
浩太「樹里ちゃん。俺、一生樹里ちゃんのこと幸せにするから」
樹里「……トイレでのプロポーズ忘れていい？こっちで初めて聞いたことにしていい？」
浩太「うん」
樹里「よろしくお願いします」
見つめ合って笑う樹里と浩太。

○マンション・キッチン

洗い物をしている樹里（27）。
スマートスピーカー「赤ちゃんが転びました」
赤ちゃんの泣き声がリビングから聞こえて来る。
樹里「あー、はいはい」
樹里、ロボット掃除機の脇を通ってリビングに向かう。

○同・リビング
泣いている田中愛羅（1）。
脇にはスマートスピーカーとカメラが置いてある。
樹里、愛羅を抱き上げる。
樹里「泣かないよー、愛羅ー」
玄関のドアが開く音。
樹里「あ、帰ってきた」
浩太（27）、入ってくる。
樹里「おかえり」
浩太「ただいま」
浩太、愛羅を抱っこする。
浩太「愛ちゃーん。パパ帰ってきたよー」
スマートスピーカー「おかえりなさい」
浩太「どう？　子守りＡＩ」
樹里「結構役立ってるよ。お昼寝から起きたときとか教えてくれるし」
浩太「じぃじばぁばに感謝ですねー」
樹里「お風呂入れちゃって」
浩太「はぁい。行こうねー」
浩太、愛羅を抱っこしたまま風呂場に向かう。
浩太の声「電気を付けて」
風呂場の電気がつく。
樹里、テレビを見る。
ドラマの予告ＣＭが流れる。
『脚本　ＡＩ』の文字。
樹里「（テレビを見つめて）……」
浩太の声「ママー、詰め替えってあったけー？」
樹里「はーい」
樹里、風呂場に向かう。

○ファミレス・店内
配膳ロボットがジュースを運んでくる。
特に興味を示さない愛羅。
海荷（27）、ジュースを受け取る。
海荷「はーい、愛ちゃん」
樹里「ありがとーって」
海荷「すっかり樹里もママですなぁ」
海荷、紙ナプキンを取り絵を描き始める。
樹里「なんとかねぇ」
海荷、愛羅に紙ナプキンを渡す。
キャラクターが描かれている紙ナプキン。
樹里「よかったねー、愛羅。このうさちゃん好きだもんね」
海荷「元イラストレーターの腕の見せ所」

○同・店前
樹里、ベビーカーを押して出て来る。
樹里「お待たせー」
海荷、看板を見つめている。
少女のイラストが描かれている看板。
海荷「……これさぁ、ＡＩが描いてんだよ」
樹里、看板を見る。
海荷「すごいね、色使いも構図も、何もかも完璧。そりゃ人間に仕事来なくなるわけだ」
樹里「海荷……」
海荷、ベビーカーの愛羅を覗き込んで、
海荷「愛たん、海ちゃんとアイスでも食べるか？」
キャッキャ笑う愛羅。

○映像制作会社・社内
鈴原蓮（22）、パソコンに向かっている。
画面にはＡＩとのチャットが開かれている。
『夏の始まりを想起させるような物語』と入力すると、ＡＩが瞬時に文章を返す。
浩太「鈴原ー、進捗どう？」
鈴原「終わりましたよ、こんな作業」
浩太「何ふてくされてんの」

鈴原「田中さんおかしいと思わないんですか？」
浩太「何が」
鈴原「ＡＩが創作の領域に入って来てんですよ？　イラストとか小説とか、最近じゃほとんどＡＩが書いてるじゃないですか」
浩太「あぁ……」
鈴原「今回のプロットだって、ＡＩ使って、はい、できあがりって」
遠藤（30）、鈴原の肩を揉む。
遠藤「鈴原、熱くなりすぎ。飲み行くか？」
鈴原「行かないです」
遠藤「田中も来いよ。最近付き合い悪いぞ」
浩太「愛しい娘が待ってるので」
遠藤「一次会で帰すから」
浩太「えー」
鈴原「俺も行かないですよ」

○居酒屋・店内（夜）
鈴原「だからぁ！　俺は映画界を変えるためにこの会社入ったんですって」
鈴原、ビールを一気に飲む。
鈴原「今じゃなんでもかんでもＡＩ、ＡＩ」
配膳ロボットが料理を運んでくる。
遠藤「お、来た来た」
鈴原「分かってます？　これは危機ですよ！　クリエイターの危機！　この数年で何人減ったと思ってんですか！」
遠藤「確かになぁ」
鈴原「人件費削減か知らないですけど、上の人もＡＩに頼りっきりじゃないですか！」
浩太「まぁまぁ」
鈴原「悔しくないんですか！」
遠藤「こいつ今長いものには巻かれろ主義だから」
浩太「守るものができたんです。いつまでも若くいられないですよ」
遠藤「じゃあ映画監督の夢も諦めたのか？」
浩太「それは……」
遠藤「鈴原くらいのときはギラギラしてたけどなぁ。絶対に成功してやるって感じで」

浩太「ちょ、恥ずかしいですよ」
鈴原「諦めたんですか？」
浩太「……」

○マンション・リビング（夜）
浩太、入って来る。
浩太「ただいまー」
樹里「おかえり」
浩太「ごめんね、急に飲み行ったりなんかして」
樹里「んー、いいよ。たまにはね」
ノートパソコンに向かっている樹里。
浩太「何してるの？」
樹里「職探しと保育園探し」
浩太「そっか……」
樹里「愛羅も一歳になったしねー」
浩太「ねぇ、樹里ちゃん」
樹里「うん？」
浩太「……俺」
スマートスピーカー「赤ちゃんが起きました」
樹里「起きちゃった？」
浩太「俺見て来るね」
浩太、出て行く。

○同・寝室（夜）
愛羅を寝かしつけている浩太。
ため息をつく。

○大学・講義室
教壇に立っている涼介（27）。
スクリーンには『公開講座　ＡＩと映画』と映し出されている。
講義室は大勢の人で埋まっている。
その中に浩太もいる。
涼介「僕が初めて脚本にＡＩを使ったときはそれはまぁひどい出来で。でも今はどうです？人間と変わらない、いや人間を超えた名作を書けるまでになりました」
席についていた山本幹夫（22）、手を挙げる。
涼介「（気づいて）はい」

山本「その作品が名作かどうかを評価するのは人間ですよね？　だったら人間よりＡＩの方が上だということではないのでは」
涼介「僕は別にどちらが上、とかそういう話をするつもりはありません。誤解を与える言い方でしたね」
山本「今の言い方、というより石嶺監督の作品がそれを表現してるんです。もうご自分で脚本は書かれないんですか」
涼介「……ＡＩは人間にはないような発想力を持っています。僕は映画界の発展のためにＡＩを使っていて」
山本「発展？　衰退の間違いじゃないですか？」
スタッフ「（慌てて）質問時間は後程設けますので。監督、講義を続けてください」
涼介「……はい。どうしてＡＩが名作を書けるかというと、膨大なデータを学習してまして。名作のいいところ詰め合わせの作品を作れるわけです。さらには常に最新の情報を取り入れている。新鮮さも兼ね備えていて」
浩太、山本をチラッと見る。
まっすぐ涼介を見つめている山本。

○同・喫煙所
タバコを吸っている涼介。
浩太、歩いて来て、
浩太「なんか一人すごいのいたな」
涼介「あー、あの人ね。他の講演にも来てるんだよ」
浩太「まじ？」
涼介「毎回攻撃力の強い質問してきてさぁ。出禁にしようかな」
浩太「大変だなぁ、有名人も」
涼介「一部の界隈では嫌われ者だからね、俺」
浩太「そんなことないだろ」
涼介「悪魔に魂を売った男って言われてる」
浩太「ひどい言われようだな」
涼介「ＡＩに仕事奪われたって人たちにすれば、俺みたいにＡＩで仕事してる人間は敵なんだろうな」

浩太「そんなの気にすんなって」
涼介「樹里ちゃんは？」
浩太「樹里ちゃん？」
涼介「ＡＩで脚本家もだいぶ減ったから。俺みたいなのは恨んでるんじゃないか？　加奈乃みたいに」
浩太「いや樹里ちゃんは。最近は全然、そんな話しないし。子育てでそれどころじゃないんだと思う」
涼介「そっか。浩太は？」
浩太「え」
涼介「また映画、作らないの」
浩太「俺だけ好きなことやってられないよ」
涼介「本当にいいのか？」
浩太「だって俺は、家族を守らなくちゃいけないし。涼介みたいに自由にできないよ」
涼介「俺だって別に自由にやってるわけじゃないけど」
浩太「でも抱えてるものが違うじゃん」
　涼介、煙を吐く。
　登っていく煙を見つめる浩太。
涼介「俺は、浩太と競い合って映画撮ってる未来が見えてたけどな」
浩太「……俺も見てたよ」
涼介「今からでも見れるんじゃないの」

○マンション・リビング
　テレビでアニメを見ている愛羅。
樹里「愛羅ー、近づきすぎないよー。（スマートスピーカーに）テレビの音量下げて」
　浩太、入って来る。
樹里「おかえり」
浩太「ただいま」
樹里「どうだった」
浩太「あー、面白かったよ」
樹里「さすが石嶺監督」
　浩太、愛羅を抱っこする。
浩太「あのさぁ、樹里ちゃん」
樹里「うん」
浩太「俺がさ、また映画撮りたいって言ったら

どうする？」
樹里「どうするって」
浩太「怒る？」
樹里「いや別に？　いいんじゃない？」
浩太「いいの？」
樹里「え、何。仕事辞めてってこと？　それはちょっと」
浩太「いやそういうのじゃなくて。仕事はちゃんと続ける」
樹里「ならいいよ、好きなことやりなよ」
浩太「いいの？　俺だけ好きなことやって」
樹里「愛羅もだいぶ手かからなくなったし」
浩太「……樹里ちゃんは？」
樹里「うん？」
浩太「樹里ちゃんは書かないの」
樹里「私は」
浩太「樹里ちゃん脚本でさ、俺監督で、映画撮ろうよ！　大学の時みたいにさ。田中・河野組で。あ、今はどっちも田中か」
樹里「でも、これから働いたり愛羅の保育園とか」
浩太「まだ働かなくていいよ！　俺頑張るし」
樹里「えー、でも」
浩太「樹里ちゃんにまた脚本書いてもらいたいんだ。それで俺撮りたい」
樹里「……分かった」

○映像制作会社・社内
遠藤、浩太のパソコンを覗いて、
遠藤「自主製作映画コンペティション？」
浩太「今度出そうと思って」
遠藤「おぉ、また撮るんだ。奥さんの許可出た？」
浩太「今回奥さんが脚本なんです」
遠藤「へぇ。夫婦共同か」
浩太「子どもができてからは奥さんも脚本書けてなかったんで。やっとですよ」

○マンション・リビング
樹里、ノートパソコンを開く。
肩を回して、

樹里「よーし」

○テレビ局・会議室
スマホを見ている加奈乃（27）。
ＳＮＳで『桜井加奈乃』と調べている。
『つまらない』『終わった』と投稿が出てくる。
ＡＤ、入ってくる。
ＡＤ「すみません、お待たせしました」
加奈乃「いえ」
ＡＤ「今回桜井さんにはＡＩ脚本の校閲をお願いしたくて」
加奈乃「ＡＩの下請けってことですね」
ＡＤ「あの、僕個人としては桜井さんにまた脚本を書いてもらいたいと思ってます。テレビ局に就職したのも桜井さんのドラマきっかけなので」
加奈乃「……ありがとうございます」
ＡＤ「なんかいろいろ言う人はいますけど、僕は桜井さんの脚本が一番面白いと思ってます！」
加奈乃「知ってます」
ＡＤ「へ」
加奈乃「私がつまらなくなったんじゃない。世間がつまらなくなったんです。ＡＩのせいで」

○同・スタジオ
アナウンサー「エンタメにＡＩが使用されることが当たり前になった現状をどうお考えですか？」
涼介「可能性が広がったと思います。製作時間も大幅に短縮できたし、ＡＩを使えば誰でも映画を作れるので」
アナウンサー「ですね。ＡＩ映画のパイオニアとなった石嶺監督には国内外から大きく称賛されています」
涼介「（ぼそっと）恨まれてもいますが……」

○同・エレベーター
乗りこんで来るスタッフと涼介。

涼介、乗っていた加奈乃に気づく。
スタッフ「お疲れ様です」
加奈乃「（にっこりとして）どうも」
涼介「お疲れ」
加奈乃、無視してスマホを見る。
スタッフ「監督と桜井さんって同じサークルだったんですよね。今でも集まったりするんですか」
涼介「あー、最近は全然。久しぶりに飲み会でも開くか」
加奈乃「（スタッフに）裏切者がいたら盛り下がりますよね」
スタッフ「えっ、えっ？」
涼介「（ため息をついて）キャラ変しすぎてない？　昔はもっと余裕あって穏やかだったよ」
加奈乃「（スタッフに）余裕なくしたのは誰のせいだと思います？」
エレベーターが止まる。
加奈乃・涼介、肩をぶつけ合いながら出る。

○同・エレベーターホール
涼介「そういえば浩太、また映画撮るんだって。樹里ちゃん脚本で」
加奈乃「書けるの？」
涼介「え？」
加奈乃、歩いていく。

○マンション・リビング
ノートパソコンに打ち込んでいる樹里。
手が止まる。
樹里「んー……」
愛羅が騒ぐ。
樹里「はいはい」
樹里、愛羅を抱っこする。
樹里「……疲れたなぁ」
スマートスピーカー「お疲れ様です」
樹里「（笑って）どうも」
愛羅、樹里の頬を撫でる。

樹里「ありがとう」

○映像制作会社・社内

鈴原「田中さん！　聞きましたよ！　俺にも手伝わせてください！」

浩太「え、何？」

鈴原「このＡＩ時代に打ち勝つような映画を作るんですよね？　俺もやらせてください！」

浩太「いや別にそこまでの気持ちでは」

鈴原「でもコンペ出すんですよね？」

浩太「まぁ目標があった方がいいかなと」

鈴原「俺、学生生活最後のコンペ、ＡＩが作った映画に負けたんです。その仇を！　取らせてください！」

浩太「荷が重いなぁ」

鈴原「もう何でも言ってください。サークルの仲間連れて来ますよ！」

○マンション・リビング（夜）

ノートパソコンを見ている浩太。

樹里「今回は家族愛をテーマにしようと思って。バラバラだった家族が父親の死をきっかけにまた絆を深めるって話」

浩太「うんうん」

樹里「どう？」

浩太「うん。いいと思うよ」

樹里「じゃあこのまま進めるね。まだラストが決まってないんだよなぁ」

樹里、ノートパソコンを見る。

浩太、樹里を見つめる。

○居酒屋・店内（夜）

浩太「俺帰りたいんだけど。愛する娘が」

鈴原「お願いしますって。どうしても会わせたいんです」

鈴原、若者が集まるテーブルに浩太を連れて行く。

浩太「えっと？」

鈴原「俺の大学時代のサークル仲間です」

鈴原、浩太を席に着かせる。

鈴原「えー、みなさん！　こちらが我らが大将、田中監督です！」
拍手をする若者たち。
鈴原「打倒ＡＩ！　カンパーイ！」
一同「カンパーイ！」
ビールジョッキを持たされる浩太。
浩太「いやまだ脚本もできてないし」
鈴原「決起集会ですよ。俺らみんないつでも動けるんで」
若者「奥さんが脚本家なんですよね？　今回も奥さんの脚本を使うって」
浩太「はい。彼女も大学から書いてるんだけど子ども産まれてからは書いてなかったから、ちょうどいいかなって」
鈴原「今回のはどういうテーマなんですか？」
浩太、タブレットを取り出し操作する。
浩太「共用のファイルに入れてもらってたから」
鈴原「あ、じゃあ、小野田さーん」
小野田美羽（21）、鈴原の近くの席にくる。
鈴原「小野田美羽さん。一個下なんですけどうちの映画サークル一の脚本家で」
美羽「こんばんは」
浩太「どうも」
鈴原「小野田さんも一緒に見せてもらっていいですか」
浩太「あぁ、うん」

○アパート・海荷の部屋（夜）
海荷「（電話していて）へー、また脚本書き始めたんだ」
樹里（電話）「そうなの。浩太くんが映画撮るっていうから」
電話をしながらペンタブレットで女の子のイラストを描いている海荷。

○マンション・リビング（夜）
電話をしながらノートパソコンを開いている樹里。
樹里「懐かしいね。こういう作業通話」

海荷（電話）「よくやったよねー。お互い締め切り前に徹夜でさ」
樹里「今はそんな無理できないけどね」

○アパート・海荷の部屋（夜）
海荷、線を書いては消しを何度も繰り返す。
樹里（電話）「やっぱ徹夜って年齢制限あるじゃん」
海荷「あー、あるある」
樹里（電話）「でも久々脚本書いたけど、なんか……。昔みたいに書けないね。全然進まないの」

○マンション・リビング（夜）
樹里「どうすれば書けるんだっけ」
海荷（電話）「ＡＩ使えば？」
樹里「え？」

○アパート・海荷の部屋（夜）
海荷「（笑って）だってもう無理だって。人間がどうこうしようたって」
海荷、ペンを投げ捨てる。
海荷「結局は勝てない。だから……」
樹里（電話）「海荷？」

○マンション・リビング（夜）
海荷（電話）「ごめん切るね」
樹里「海――」
電話が切れる。

○居酒屋・店内（夜）
タブレットを囲んでいる浩太・鈴原・美羽。
鈴原「なるほど……」
山本の声「どっかで見たような話ですね」
浩太、声のした方を見ると、山本がタブレットを覗き込んでいる。
浩太「（山本の顔を見て）あ」

鈴原「ちょ、山本。確かに自由奔放に生きてきた主人公が父の死をきっかけに家族と向き合うって散々擦られてきたテーマだけども」
浩太「そう、だよね」
山本「ＡＩに勝つんだったら人間しか書けないものを書かないと」
鈴原「そう！　そうなんだよ」
　話し込む鈴原と山本。
　美羽、浩太の袖を引っ張って、
美羽「あの」
浩太「はい？」
美羽「もしよかったら私の脚本読んでみてもらえませんか？」
浩太「え？」
美羽「監督にアドバイスもらいたいんです」
浩太「あ、あぁ、はい」

○マンション・リビング（夜）
　浩太、入ってくる。
浩太「ただいま。ごめんね、また飲み行っちゃって」
樹里「ううん。後輩くんもいい人だね。自分の仲間連れて手伝ってくれるなんてさ」
浩太「やる気がね、すごいよ。どう、脚本は」
樹里「うーん。ごめん、まだかかるかも」
浩太「まぁ愛羅の世話もあるし大変か。俺もなるべく家事するから」
樹里「……うん、ありがとう」
　樹里、気づいて、
樹里「タバコ……」
　浩太、自分の匂いを嗅ぐ。
浩太「今日みんな吸ってたからさ。あ、俺は吸ってないよ？」
樹里「愛羅ができてからすっぱり辞めてくれたもんね。なんか懐かしい匂い」
浩太「ね。大学の頃思い出したな。映画の話ばっかして、みんで徹夜して映画撮って」
樹里「うん。その頃は……」
浩太「そういえば涼介が久々に集まりたいって言ってたよ」

樹里「いいね。私も行きたいな」
浩太「声かけてみるよ。愛羅はお母さんとこお願いできるかな」
樹里「大丈夫だと思う」
浩太「じゃ、決まり。あとメンバーは」
樹里、ノートパソコンを見つめる。

○映像制作会社・社内
パソコンに向かっている浩太。
メールの通知。
『小野田美羽』からメールが届く。
添付ファイルを開くと、脚本データが入っている。
鈴原「田中さん、この間はすみませんでした」
浩太「（ビクッとして）へ、何？」
鈴原「俺ら別に奥さんの脚本をディスったわけではないです。ただ、コンペで勝つってなるとクオリティ高いもの出さないと」
浩太「あ、あぁ、うん。そうだよね」
鈴原「コンペも今はＡＩ使って当たり前なんです。そうなると……悔しいですけどやっぱ並大抵の物じゃ敵わないですよ」
遠藤「おー、後輩に詰められてんのか田中」
浩太「（苦笑いして）いや……」
遠藤「別に優勝目指そうってわけじゃないんだろ？　奥さんとまた作りたいっていうか」
鈴原「趣味でやるって言うなら口出さないですけど、また夢追うって言うなら厳しいですよ」
浩太「俺は……」

○居酒屋・店内（夜）
涼介・浩太・樹里、乾杯する。
涼介「やっぱ俺がいるとみんな来ないか」
浩太「いやたまたま予定合わなかっただけだって」
樹里「そうだよ。どうしたのそんな弱気になって」
涼介「いやこの間も加奈乃がさ」
加奈乃、入ってくる。
浩太「あれ、加奈乃？」

涼介「俺来るってちゃんと言った？」
加奈乃「聞いたよ。（店員に）すみません、生！」
涼介「喧嘩しに来たってこと？　悪いけど俺もうメンタルが」
加奈乃「樹里も来るって聞いたから」
樹里「あ、あぁそうなの？」
加奈乃「また脚本書き始めたんだって？」

○同・店前（夜）
タバコを吸っている涼介。
涼介「今日俺みんなに慰めてもらうつもりで来たのにさ」
浩太「まぁまぁ」
涼介「加奈乃が俺のこと憎んでるのって明らかにとばっちりだよな」
浩太「んー、まぁね」
涼介「俺だって同じなのに」

○同・店内（夜）
タブレットを見ている加奈乃。
画面には脚本。
樹里、加奈乃をチラチラ見ながらビールを飲む。
店員「お待たせしましたー。ぽりぽりきゅうりでーす」
樹里「あ、浩太くんの」
樹里、小鉢を受け取ってきゅうりをつまむ。
加奈乃「（タブレットを見たまま）なんで脚本家が減ったと思う？」
樹里「ＡＩが脚本書くようになったから？」
加奈乃「ＡＩなら確実に面白いし、しかも人件費がかからない。お金出す側としてはこれ以上ない好条件だよね」
樹里「うん……」
加奈乃、樹里の顔を見る。
加奈乃「でもね、そんなことは大した問題じゃないの」
樹里「え？」
加奈乃「結局は書く人が諦めたからなの」

○同・店前（夜）
涼介「俺どうしても脚本がダメでさ。コンペでもセリフの質が悪いとか言われたり。でもどうしようもなくて。頑張って書いても無駄で」
涼介、タバコを灰皿に落とす。
涼介「ただ注目されればって思いでＡＩ使ってみたらそれが受けて。しばらくはその奇抜さでやってたんだけど、だんだん変わってきたんだ。ＡＩが感動を生み出す、人の心を動かす。そんな時代になった」
涼介、笑って、
涼介「俺が書く前に、ＡＩがやり遂げちゃったんだよ。俺は、ＡＩに負けたんだ」

○同・店内（夜）
加奈乃「面白い脚本を書いて。そう言われたら何日かかる？　十人中何人が面白いと思うものを書ける？　ＡＩはね、一瞬で、十人中十人が面白いと思うものを書くよ」
樹里「そんなの、人間だってできるよ」
加奈乃「ＡＩには勝てない。みんな思い知ったの」
樹里「でも私は」
加奈乃「私の周りはそうだよ。仕事無くなって大勢の人が引退した。いまだに自分で書いてます、なんて人もアイディア出しにはＡＩ使ってる」
樹里「加奈乃は？　加奈乃は、どうなの」
加奈乃「私は周りとは違う。樹里には無理でしょ」
樹里「何で無理なの」
加奈乃「私は苦しみながら書き続けてきた。樹里は？　樹里は書くの辞めたでしょ」
樹里「だってそれは」
加奈乃「これ、つまらないよ」
加奈乃、タブレットをテーブルに置き、席を立つ。
加奈乃「もう一つの方がまだまし」
加奈乃、出て行く。

樹里、タブレットを見る。
『小野田美羽』という名前のデータが共有ファイルに入っている。

○同・店前（夜）
加奈乃、出てくる。
涼介「うわ」
浩太「帰るの？」
加奈乃「うん」
涼介「帰れ帰れ」
加奈乃「ねぇ、聞いてもいい？」
浩太「うん？」
加奈乃「結婚してよかった？」
浩太「うん」
加奈乃「本当にそう思ってる？」
浩太「何、急に」
加奈乃「だって結婚してなかったら映画撮り続けてたでしょ」
浩太「え」
加奈乃「そしたら今頃、もっとって。考えたことない？」
浩太「それは」
加奈乃「じゃあね」
加奈乃、歩いていく。
浩太、店の中を覗いて、
浩太「あ！　俺のきゅうり食べたろ！」
加奈乃、無視して歩いていく。

○同・店内（夜）
涼介「刺されなかっただけよかったと思え」
タブレットを見つめている樹里。
浩太「樹里ちゃん？」
樹里「あ、おかえり」
浩太「どうしたの？」
樹里「これってどうしたの？」
樹里、浩太にタブレットを見せる。
浩太「あー、鈴原の後輩の子の脚本。ちょっと読ませてもらってたんだ。ごめん、間違えて共有の方入れちゃってた」
樹里「ううん」

涼介「加奈乃には何もされなかった？　大丈夫？」
樹里「大丈夫だよ」
樹里、タブレットを見つめる。

○ファミレス・店内
画用紙に絵を描いている海荷と愛羅。
樹里「ごめんね、海荷」
海荷「いいの、いいの」
樹里「どうしても今日中に仕上げたくて。お母さんも用事あったからさ。愛羅見てくれて助かる」
海荷「海ちゃんと仲良しだもんねー、愛たん」
樹里「ありがとう」
樹里、ノートパソコンに打ち込む。
打ち込んでは消しを繰り返す。
ため息をつく。
樹里「こんな……」
海荷「樹里？」
愛羅、コップを倒す。
海荷「あ」
樹里「愛羅！」
ジュースでビシャビシャになるテーブル。
樹里「何やってんのもう！」
海荷「ごめん、私が見てなかったから」
樹里、テーブルに突っ伏す。
海荷「樹里？」
樹里「ううん、違うの。ごめん。私さ、もう書けないんだ」
海荷「え？」
樹里「書いても書いても、つまらないが積み重なっていくだけなの。私やっぱり才能ない」
海荷「そんなこと（と言いかけてやめる）。……頑張っても無理なことってあると思う」
樹里「うん……」
海荷「ごめんね。本当は慰める言葉をかけるべきなんだろうけど、私はそんな表面的なことはしない」
樹里「うん」

愛羅の笑い声。
樹里、愛羅を見る。
樹里を見てニコニコしている愛羅。
樹里、目に涙を浮かべる。

○映像制作会社・社内
スマホの着信音。
浩太、スマホを見ると、『美羽』からラインが来ている。

○同・会社前
リクルートスーツ姿の美羽、手を振る。
浩太、美羽に駆け寄る。
美羽「ちょうど近くで面接あったんで」
浩太「そうなんだ。お疲れ様。どう、手ごたえは」
美羽「んー、微妙です。どうしても映像系入りたいんですけどねぇ」
浩太「それはやっぱり、脚本を続けたいからってこと？」
美羽「はい！　監督も映画撮りたいから今の会社入ったんですよね」
浩太「まぁ。現実は厳しいけどね」
美羽「夢を追い続けるのってかっこいいです。今回の作品も次へのステップになるといいですね」
浩太「次、か」
美羽「そういえばこの前の脚本どうでした？　前回から少し修正してみたんですけど」
浩太「うん、よかったよ」
美羽「やった。監督にアドバイスもらえるので勉強になってます」
浩太「小野田さんは才能あるよ。このまま就職しないでもいいんじゃない？」
美羽「そんなわけにはいきませんよー」
浩太「就職しちゃうと時間なくなるからね。うちの奥さんも就職してからは全然書けなくて」
美羽「それって時間の問題なんですか？」
浩太「うん、たぶん。思うよ。もし就職せずに

書き続けてたらって。もし……」

○住宅街（夕）

愛羅を乗せたベビーカーを押して歩く樹里。

浩太、駆け寄って来て、

浩太「樹里ちゃん！　ちょうど」

樹里「あ、お疲れ様」

浩太、ベビーカーを覗いて、

浩太「あ、寝てる」

樹里「今日愛羅にひどいことしちゃった」

浩太「え？」

樹里「ジュースこぼして怒鳴っちゃったんだよね」

浩太「でも怒ることくらい」

樹里「それだけじゃないの。私、もし愛羅を産まなかったらって考えちゃったの」

樹里、立ち止まる。

樹里「愛羅を育ててきて、やっと書ける余裕が出てきたと思ったら、いつの間にかＡＩが脚本書くようになってて。今更私がまた書いても追いつかないくらいになってて。だったら私……」

すやすや眠っている愛羅。

樹里「愛羅ができなかったら、私はずっと脚本を書き続けてて、もしかしたら今頃……」

樹里、うつむく。

浩太「……この前加奈乃に結婚してよかったかって聞かれたんだ」

樹里、浩太を見る。

浩太「よかったって答えた。樹里ちゃんと結婚して、愛羅が産まれて、本当によかった」

樹里「でももしって、考えたことない？」

浩太「ううん、ないよ。だって今が最高の人生だから」

樹里「田中浩太としてはでしょ。映画監督、田中浩太としてはどうなの？　愛羅もいなくて結婚もしてなかったら、もっと別の人生があったんじゃない？」

浩太「そんな」

樹里「会社辞めて、好きに映画撮れてたかもしれないし、そうすればキャリアも積んで、今頃もっと」
浩太「それでも俺は、愛羅がいて、樹里ちゃんがいて、よかったと思ってるよ」
樹里「嘘」
浩太「だって自分の家族を持たなきゃ分からなかったことだっていっぱいある」
浩太、ベビーカーを覗いて、
浩太「樹里ちゃんだって愛羅を産んだから、今回家族愛をテーマにした脚本を書いたんじゃない？　今の樹里ちゃんにしか書けないものがあるはずだよ」
樹里、涙を流す。
浩太、樹里の涙を拭く。
浩太「樹里ちゃんの脚本、すごく楽しみにしてる。また一緒に映画作ろう」
樹里「うん。（笑って）ありがとう」
浩太、微笑む。

○マンション・リビング（夜）
浩太、ノートパソコンを見ている。
画面には脚本のデータ。
じっと画面を見つめている浩太。

○同・寝室（夜）
愛羅に添い寝をしている樹里。
浩太、入ってくる。
樹里「（起きて）うん？」
浩太「樹里ちゃん」
樹里「どうしたの？」
浩太、樹里をじっと見つめる。

○居酒屋・店内（夜）
鈴原「えー、では脚本もできたということで。いよいよ田中組始動です！　乾杯！」
一同「かんぱーい！」
乾杯する浩太と樹里。
美羽「料理適当に頼んじゃいますねー」
浩太「あ、美羽ちゃん」

美羽「ポリポリキュウリですね」
浩太「そうそう」
樹里、浩太を見る。
鈴原「脚本読みたいです！」
浩太「じゃあグループラインに共有します」
浩太、スマホを操作する。
一同、スマホを見る。
浩太「タイトルは八月の空に。今回は小野田さんの脚本で撮ります」
樹里、ビールを飲む。
美羽「え、本当ですか？」
鈴原「（樹里をチラチラ見ながら）いいん、ですか？」
浩太「うん」
浩太、樹里を見る。
樹里、笑ってみせる。
山本「（スマホを見て）まぁいんじゃないですか」
浩太「で、今後のスケジュールなんですけど」

○マンション・リビング（夜）
樹里「（電話をしていて）うん、ありがとう。明日お昼前には迎え行くから」
樹里、電話を切る。
樹里「愛羅大はしゃぎだったって」
浩太「じぃじばぁば大好きだもんね」
樹里「うん」
浩太「……ねぇ樹里ちゃん」
樹里「明日はお昼くらいに迎えに行けばいいからー、朝ゆっくりだね。どっかモーニングでも食べに行く？」
浩太「ごめんね」
樹里「……何で謝るの」
浩太「俺今回のコンペは結構本気で取り組みたいんだ。鈴原たちも協力してくれるし。これでいいとこ行ければ今後に繋がると思うし」
樹里「そうだね」
浩太「小野田さんの脚本の方が今回はいいかなって思って。もちろん樹里ちゃんの脚本もよかった。次回こそは樹里ちゃんの脚本で」

樹里「分かってるよ。何回も聞いたって。私も
それでいいって言ったでしょ？」
浩太「ごめん。俺、やっぱり夢を追いたい」
樹里「うん」
浩太「映画監督になりたい」
樹里「うん」
浩太「本当にごめん」
樹里「謝らないで」
浩太「うん……」
浩太、身支度をする。
浩太「コンビニ、行ってこようかな。酒買って
くる。樹里ちゃんも何かいる？」
樹里「ううん、大丈夫」
浩太「うん。じゃあ、行ってくるね」
浩太、出て行く。

○同・玄関（夜）
浩太、ため息をつく。

○同・リビング（夜）
玄関のドアが閉まる音。
樹里、しゃがみ込む。

○住宅街（夜）
走る浩太。
息が切れて立ち止まる。
頭を掻いて、
浩太「あーあ……」

○マンション・リビング（夜）
樹里「もうやだ……」
スマートスピーカー「いつもお疲れ様です、お
母さん」
樹里「……ありがとう」

○公園・広場
撮影の準備をしている一同。
涼介、クーラーボックスを抱えてくる。
涼介「お疲れ様ー」
浩太「涼介」

男「石嶺監督！」
盛り上がる一同。
涼介「差し入れ」
浩太「ありがとう」
美羽、駆け寄って来て、
美羽「監督ー、次のシーンなんですけど。（涼介に気づいて）あ！　石嶺監督！」
浩太「今回の脚本を担当してくれてる小野田美羽さん」
美羽「初めまして。小野田です」
涼介「初めまして」
浩太「ごめん、何だっけ」
美羽「次のなんですけど、ここの母親のセリフ変えてもいいですか？」
脚本を見る浩太と美羽。

○公園・喫煙所
タバコを吸っている涼介。
涼介「大丈夫？　俺来てよかった？　刺されない？」
浩太「大丈夫だよ。なんやかんや言って大物監督にみんなソワソワしてるから」
浩太、タバコに火を付ける。
涼介「タバコ」
浩太「最近また吸うようになっちゃって。周りが吸ってるからかな。あ、樹里ちゃんには内緒で」
涼介「樹里ちゃん、大丈夫なの？」
浩太「大丈夫って？」
涼介「自分のじゃなくて別の人の脚本をお前が撮るって」
浩太「それはもう話ついてるよ。樹里ちゃんも分かったって言ってくれた」
涼介「そう……」
浩太「美羽ちゃんってさ、すごいんだよ。若さなのかな。セリフの一つ一つに感性が見えて」
涼介「美羽、ちゃん？」
浩太「うん？」
涼介「お前まさかあの女子大生に手出してないだろうな。不倫とか勘弁しろよ」

浩太「バカ。そんなわけないだろ」
涼介「だって、なんか特別扱いしてないか？」
浩太「してないよ。……ただ」
　浩太、タバコの煙を吐く。
浩太「大学の頃を思い出しただけで。樹里ちゃんにも、ああいう希望が見えたのになって」

○公園・広場
　休憩している一同。
鈴原「（スマホを見ていて）うわ、マジかよ。横島監督ってＡＩ使ってたんだ」
美羽「鈴原さん好きでしたよね」
鈴原「ＡＩの力は借りないとか言っててかっこよかったのに。裏ではＡＩで仕事してたのか」
美羽「どうして裏で使ってたら非難されるんですかね。石嶺監督みたいにＡＩで絶賛される人もいるのに」
鈴原「何でって。そりゃ嘘はよくないからでしょ」
山本「何よりダサい」
鈴原「そうそう！」
美羽「そうですかね。目的のためには手段選ばないことも必要だと思いますけど」
鈴原「野心家だね、小野田さん」
美羽「そうじゃないとこの時代生きれませんよ」

○ファミレス・店内（夕）
　ノートパソコンで作業している浩太。
　愛羅、ぐずりだす。
樹里「愛羅眠いのかも」
浩太「ごめんね、愛ちゃん。樹里ちゃん、ごめん。先帰っててもらえる？　俺キリいいとこまでやりたくて」
樹里「夜ご飯は？」
　樹里、愛羅を連れて席を立つ。
浩太「うーん、食べてくかも」
樹里「そう……」
　美羽・鈴原、入ってくる。
鈴原「あれ、監督」
美羽「お疲れ様です」

浩太「おー、お疲れ。ちょうどよかった。今日のシーンなんだけどさ」
鈴原、浩太の隣に座る。
美羽「あ、どうぞ奥様」
美羽、樹里に椅子をすすめる。
樹里「あ、いえ」
浩太「二人は帰るから」
美羽「そうですか？」
美羽、樹里が座ってた席につく。
浩太「尺的にここは削ろうと思うんだけど」
ノートパソコンを囲む浩太・鈴原・美羽。
樹里、愛羅の手を引いて店から出て行く。

○マンション・寝室（夜）
愛羅に添い寝している樹里。
ドアの開閉音が聞こえる。

○同・リビング（夜）
荷物を整理している浩太。
樹里、入ってくる。
樹里「おかえり」
浩太「ごめん、すぐ行かないと。荷物取りに来ただけだから」
樹里「そう」
浩太「撮影順調だよ。これならコンペに間に合いそう」
樹里「よかったね」
浩太、カバンを担ぐ。
浩太「じゃ、行ってきまーす」
樹里「私の脚本のどこがダメだった？」
浩太「え？」
樹里「どこがつまらなかった？　わたしはどうすればいい？」
浩太「つまらなくないよ。本当によかった」
浩太をまっすぐ見つめている樹里。
浩太「ただ、今回は、ちょっと違ったっていうか」
樹里「何が違うの？」
浩太「だから、何がっていうか、よかったんだけど、その」

樹里「もういいよ」
浩太「……行ってくるね」
浩太、出て行く。
樹里「……もう私は浩太くんと同じ夢を見れないのかな」
スマートスピーカー「すみません、よく分かりませんでした」
樹里「私の夢はもう叶わないってこと」
スマートスピーカー「そんなことありません。時短勤務や在宅勤務で子育てと仕事を両立しているママがたくさんいます。ワーママ歓迎の求人情報をメールでお届けしますか？」
樹里「……いらない」
スマートスピーカー「かしこまりました」

○同・寝室（夜）
眠っている愛羅。
樹里、入ってくる。
愛羅の頬を撫でる。

○ファミレス・店内
樹里、愛羅にアイスクリームを食べさせる。
樹里「おいしい？」
加奈乃、樹里の席に来る。
樹里「加奈乃。ごめんね、来てもらって」
加奈乃「別にいいけど」
加奈乃、愛羅を見る。
樹里「ほら、愛羅。こんにちはーって」
加奈子「こ、こんにちはー」
樹里「(笑って)加奈乃って子ども苦手だっけ」
加奈乃「いいでしょ別に。で、どうしたの」
樹里、加奈乃にノートパソコンを見せる。
樹里「加奈乃に脚本読んでもらいたくて」
加奈乃「私に売り込んでも無駄だよ。今そんなに権力ないから」
樹里「アドバイスが欲しいの。プロの脚本家から」
加奈乃「私に？」
樹里「お願いします」

樹里、頭を下げる。
加奈乃、ノートパソコンの画面を見る。
樹里、愛羅の手を握る。
加奈乃、ノートパソコンを操作する。
不思議そうに加奈乃を見る樹里。
加奈乃、ノートパソコンの画面を樹里に見せて、
加奈乃「はい」
画面にはＡＩとのチャットが開かれている。
『脚本の評価をして』にＡＩが長文で返している。
樹里「え？」
加奈乃「ＡＩってね、最近こういうこともできんの」
樹里「私は加奈乃の、人間の評価が欲しいんだけど」
加奈乃「正直私も分かんなくなってんだよね。何が面白いのか。もうＡＩに聞いて」
樹里、ＡＩの文章を読む。
樹里「すごいね。私の欲しかった答え、全部書いてある」
加奈乃「よかったね」
樹里「ずっと書き続けてればよかった？　私、今更もう遅い？　もう私、ダメなのか」
加奈乃「……私ももうよく分かんなくなってきてる」

○本屋・店内
積み重なってる書籍の横のポップに『ＡＩが紡ぐ物語』と書かれている。
『ＡＩ作品』の見出しがついた棚がいくつもある。

○街中
スマホを見ている若者。
画面にはＳＮＳ。
イラストに『＃ＡＩart』とつけられた投稿に二万いいねが付けられている。

○デパート・入口前
映画のポスターが飾られている。
『脚本　ＡＩ』の文字。
ポスターを見つめる加奈乃。

○マンション・リビング（夜）
スマホを見ている樹里。
画面には浩太とのラインのトーク画面。
樹里の『愛羅寝た』『ご飯いる？』『何時に帰って来る？』のメッセージには既読がついていない。
樹里、ため息をついて、ＡＩとのチャットを開く。
マイクボタンを押して、
樹里「（スマホに）何時に帰って来る？」
ＡＩ「私はいつでもあなたのそばにいます」
樹里「（スマホに）私もうダメかな」
ＡＩ「あなたはダメなんかじゃありません。きっと輝かしい未来が待っています」
目に涙を浮かべる樹里。
ＡＩ「もしよろしければ転職サイトを紹介しますか？」
樹里、ＡＩとのチャットを閉じる。
浩太とのラインのトーク画面を開く。
既読はついていないまま。
樹里「浩太くんが言ってよ……」

○ファミレス・店内（夜）
ノートパソコンで作業している浩太。
スマホは画面を下にしてテーブルの上に置かれている。

○映像制作会社・社内
編集作業をしている浩太。
遠藤「田中ー。いくら暇だからって堂々とサボるなー」
浩太「すみません」
遠藤「なんかイキイキしてるな。最近」
浩太「そうですか」
遠藤「ギラギラが戻ってきた」

浩太「何ですかそれ。やめてくださいよ」
鈴原、浩太に駆け寄って来る。
鈴原「監督」
遠藤「（からかって）監督ー」
浩太「どうしたの」
眉をひそめている鈴原。
浩太「何？」
鈴原「小野田さん、あれ、脚本、ＡＩ使ったって」
浩太「え？」

○居酒屋・店内（夜）
美羽「全部ＡＩに書かせたわけじゃないです。構成とかＡＩを使ったってだけで」
鈴原「（浩太に）コンペの応募要項でＡＩ使用の場合は申請することって項目があるんですけど、一応確認したら白状しまして」
山本「これはＡＩ時代に勝とうって作り始めた映画なんだぞ？　それが脚本はＡＩ使いましたなんて」
美羽「え、私ＡＩ使わなかったって言いました？　言ってないですよね？　最初から」
山本「お前何逆切れしてんだ」
浩太「喧嘩とかはやめよう」
鈴原「どうします？　監督。撮り直すにしても今からじゃコンペ間に合わないですよ」
浩太「……撮影はこのまま続ける」
山本「はぁ？」
浩太「別に今回のコンペもＡＩの使用が禁止されてるわけじゃないでしょ。ならこのまま」
山本「ちょっと待ってくださいよ。俺はそんな映画のために協力したわけじゃ」
鈴原「やめろって」
山本「何のためにまた映画撮るって決めたんですか！」
浩太「……とにかく、スケジュール通りに」
浩太、出て行く。
鈴原「何でこんなことしたの。小野田さん」
美羽「どうしても、入賞したかったから。一つでも実績あれば就活でも有利かと思って」

山本「そんなことのために」
美羽「私はどうしても脚本家になりたいんです！　そのためには、使えるもの何でも使わないと」
泣き出す美羽。

○テレビ局・会議室
ＡＤ「桜井さんにお話しするか迷ったんですけど」
ＡＤ、加奈乃に企画書を見せる。
ＡＤ「今度若手でドラマ撮ることになったんです」
加奈乃「へぇ」
加奈乃、企画書を手に取る。
ＡＤ「桜井さんに脚本をお願いしたいんですけど、一つ条件があって」
加奈乃、企画書のページをめくって、
加奈乃「ＡＩを使用すること」
ＡＤ「桜井さんくらいの人だったら普通に書いてもらってもいいはずなんですけど、すみません。上がどうしても」
加奈乃「なるほど」
ＡＤ「全然、断ってもらっても構いません」
加奈乃「考えさせてもらってもいいですか」

○映画館・館内
ベンチに座っている涼介。
加奈乃、近づいてくる。
涼介「刺さないで」
加奈乃「刺さないよ」
涼介「どうしたの、急に呼び出して。俺なんて嫌いなんでしょ」
加奈乃「デートしようかなって」
涼介「え？」
加奈乃「ほら、大学の時に約束したでしょ。お互い三十超えても独身だったら結婚しようって」
涼介「そんな約束してない！」
加奈乃「したよ。六次会のカラオケで」
涼介「そんな状態の約束は無効だろ」

加奈乃「結婚しとく？」
涼介「まだ三十なってないですが。何かあった？」
加奈乃「私もう、やめようかなって。もう、何かを書くの、全部やめる」
涼介「やめるの」
加奈乃「だっていろんなものを犠牲にして身削ってきた結果がこれだよ。時代には抗えませんね」
涼介「それで俺と結婚」
加奈乃「そう」
涼介「ごめんなさい」
加奈乃「分かんないだろうね、ＡＩに頼ってる人には」
涼介「加奈乃には、俺ができなかったことができると思う」
加奈乃「無理」
涼介「俺は無理だったけど加奈乃は無理じゃないよ」
加奈乃「人に託してないで自分でどうにかしなよ」
加奈乃、涼介の肩にパンチする。
涼介「俺こそ無理だよ」
加奈乃、出口に向かう。
涼介「映画見ないの？」
加奈乃「見ない！」

○マンション・リビング
樹里、ノートパソコンを見ている。
画面には求人サイト。
樹里、愛羅の方を見る。
小さなロボットと遊んでいる愛羅。
ロボット「お歌を歌いましょう」
喜んでいる愛羅。
樹里、ふとパソコン内のファイルを開く。
映画のタイトルが付けられたテキストデータが多数入っている。
『田中・河野組企画書』という名前のデータがある。
ノートパソコンの画面を見つめる樹里。

立ち上がり、愛羅の元に行く。
樹里「愛羅、お散歩しよっか」

○公園・広場
撮影準備をしている一同。
山本「明らか士気下がってるな」
鈴原「萎えるわー」
樹里「お疲れ様です」
樹里、コンビニ袋を下げて来る。
樹里「よかったらみなさんで」
鈴原「ありがとうございます」
樹里、辺りを見渡す。
鈴原「あ、監督なら」

○同・喫煙所
タバコを吸っている浩太。
樹里「お疲れ」
浩太、ビクッとして、
浩太「樹里ちゃん！」
浩太、慌ててタバコを隠す。
樹里「愛羅の前で吸わないならいいよ」

○同・広場
鈴原と遊んでいる愛羅。

○同・喫煙所
浩太「ごめん」
樹里「大丈夫？」
浩太「うーん。みんなやる気なくなっちゃって。もともとＡＩに否定的な人が多かったから」
樹里「そっか」
浩太「全然、気づかなかったな。ＡＩってこんなところまで来てるんだね」
樹里「……」
浩太「こんなんだったら最初から樹里ちゃんの脚本で撮ってればよかったよね」
樹里「でも、監督は違うって思ったんでしょ？」
浩太「俺、見る目ないね。才能、ないな」
樹里「そんなことないよ」
浩太「……ありがとう」

樹里「これは本当だからね」
浩太「ありがとう」
浩太、タバコを灰皿スタンドに落とす。
浩太「でも俺、何のためにまた映画撮るんだろうって、分からなくなってさ」

○テレビ局・会議室
加奈乃「この間のお話、お受けします」
ＡＤ「上に掛け合ったんですけどやっぱりＡＩって」
加奈乃「いいですよ。いつもみたいにＡＩの下請けで。それでも、また脚本を書けることには変わりないですから」

○公園・喫煙所
浩太「ＡＩに勝ちたいっていうならＡＩ使った脚本で撮り続けてるのも意味分からないし、映画監督で成功したいっていうならＡＩでもなんでも使っていかなきゃいけないんだろうし」
浩太、空を見上げる。
浩太「なんだかもう分からなくなっちゃったよ」

○カフェ・店内
涼介、ノートパソコンを開いている。
画面にはＡＩとのチャットが開かれている。
『水泳部を舞台にしたスポコン青春映画の脚本』と入力すると、瞬時にＡＩが脚本形式で文章を返す。
脇に置いてあったノートを開くと、手書きのメモでびっしりと埋められている。
ノートを見つめる涼介。

○公園・喫煙所
樹里「映画が好きだからでしょ？」
浩太、樹里を見る。
樹里「それ以上でもそれ以下でもある？」
浩太「そんな簡単なことでいいのかな」
樹里「いいでしょ。それくらいのものしか作れ

ないんだから」
浩太「ＡＩには勝てないって？」
樹里「私たちはもう作るしかないんだよ。どうなろうと」
浩太「樹里ちゃんは？」
樹里「私は」
美羽の声「監督」
浩太、振り返ると美羽が立っている。
美羽「ご迷惑おかけしてすみませんでした」
美羽、頭を下げる。
浩太、何も言わず頭を掻く。
樹里「……別に悪いことはしてないでしょ」
美羽「私、どうしても」
美羽、泣き出す。
樹里、浩太の背中を叩く。
浩太「……変わらず手伝ってくれると助かる。人手はあった方がいいし」
美羽「（鼻をすすって）ありがとうございます」
浩太「みんなにも、言いに行こうか」
美羽「はい」
美羽、広場に向かう。
浩太「ありがとう、樹里ちゃん」
樹里「行ってらっしゃい」
浩太、美羽のあとを追って広場に向かう。

○公園・広場
集合している一同。
美羽「すみませんでした」
美羽、頭を下げる。
浩太「今みんなモチベーションが下がっているとは思うんだけど、なんとか完成させたいです」
浩太、頭を下げる。
浩太「お願いします」
鈴原「……ですね。今ここで辞めたら金も時間も無駄になるし」
山本「俺は降ります」
山本、歩いていく。
鈴原「おい」
浩太、鈴原の肩を掴む。

浩太「止めないでいいよ」
鈴原「でも」
浩太、首を横に振る。
浩太「じゃあ次のシーン行こう！」
一同「はい！」
準備を始める一同。
愛羅を抱っこしている樹里。
樹里「パパかっこいいね」
愛羅、笑う。

○映画館・館内
上映室から出て来る加奈乃と涼介。
涼介「面白かったね」
加奈乃「映画が？　デートが？」
涼介「映画が」
加奈乃「私も」
涼介「ＡＩ脚本もここまできたか」
加奈乃「そうね」
涼介「加奈乃もＡＩ使って脚本書いたんだって？」
加奈乃「脚本家としてご飯食べていくため」
涼介「じゃあご飯は食べれない脚本は書く気ない？」
涼介、加奈乃を見つめて、
涼介「俺と映画作らない？　加奈乃が脚本書いて」
加奈乃「私ＡＩじゃないけど？」
涼介「知ってる」
加奈乃「やってあげてもいいよ」
笑う加奈乃と涼介。

○ファミレス・店内
ノートパソコンに向かっている樹里。
キーボードに打ち込んでいる。
浩太、愛羅を連れて席に着く。
浩太「はい、樹里ちゃん。コーヒー」
樹里「ありがとう」
浩太「さぁて、俺も作業しようかな。次こそ二次審査は突破したい」
樹里「そうだね」

浩太「鈴原たちもまた協力してくれるって。山本くんは自分の映画製作で忙しいみたい」
樹里「そっか」
浩太「樹里は？　どう、進んだ」
浩太、樹里のノートパソコンを覗く。
ＡＩとのチャット画面。
『志望動機を考えて』という文にＡＩが返信している。
浩太「あ、ズルしてる」
樹里「してないよ。ね、愛羅」
浩太「……樹里ちゃん」
樹里「うん？」
浩太「幸せ？」
樹里「幸せになるしかないでしょ？」
配膳ロボットが料理を運んでくる。
愛羅「あ、ほらわんわん来たよ」
笑う愛羅。

【終】